討論のまとめと今後の課題

安井三吉

西村成雄さんのピンチ・ヒッターとうことで，事前の準備も不十分なままで進行役を勤めるはめになった。そのうえまとめまで書かなければならなくなることまで考えが及んでおらず，四苦八苦というのが実情である。当日の報告者，討論者やフロアーからの質問者の皆さんの発言を正確に伝えることができたかこころもとない。報告者と討論者の発言は，それぞれご自分で書かれているので，質疑討論の部分にしぼって整理し，私の意見を少し加えることで責めを果たすことでご容赦願いたい。

（1）岡本報告をめぐって

討論者の谷淵氏からの質問は，①李鴻章は「洋務」に取り組むに際して，「人才」，特に「軍事人才」の養成を急務としていたというが，その背景はなにか，②李鴻章の「洋務」についてその「論」は理解できたが，李鴻章は具体化に向けてどのような努力をしたのか，という 2 点であった。これに対して岡本氏は，①李鴻章は上海など条約港世界を通じて西洋を受容していた，②李鴻章の前にはいわゆる「頑固派」の存在があり，彼は，変法派の急進的なやり方とちがって，実現可能なところから着手するという方法をとった，と答えた。

フロアーからの質問として，閻立氏から①日清修好条規から日本の台湾出兵，江華島事件，琉球処分そして日清戦争にいたる間，李鴻章の対日観に変化があったか，②朝貢体制をめぐって李鴻章と黄遵憲，何如璋らの間に根本的な見解の相違はあったか，との質問があった。これについて岡本氏は，①李鴻章は日本を「軍事的脅威」と見ていて，この点では一貫していた，②それほどの違いはなかった。目指すところは同じ，立場の違い，先後の違いというものである，と答えた。川尻文彦氏からは，①「洋務」に関連する曽国藩の位置づけはどうか，②「洋務」の内実は，李鴻章，「サブリーダーズ」，康有為・梁啓超ら変法派の三者で相違があるのではないか，との質問がだされた。これについて岡本氏は，①「洋務」について曽国藩は，立案・実行をほとんど李鴻章に委ねていた，②三者の相違は時間の差，立場の違いなどによるもので目標は一致していたと見るべきだろう，と答えた。

（2）土田報告をめぐって

討論者の石黒氏から，①英米の新聞は中国をどう伝えていたか，②アメリカとヨーロッパとで民間団体の相互関係はどうだったのか，との質問が出された（②については，佐藤一樹氏からも同様の質問が出された）。これに対して土田氏は，①歴史ある大国，国民党治下で近代化に取り組んでいる国という論調だった，②アメリカ国際連盟協会会長C.アイケルバーガーがブリュッセルの世界平和大会に参加し，世界平和連合への加入を決め，さらにアメリカ平和促進会総会を結成し，ACNPJA とも連携していたが十分な活動を展開しないまま活動停止にいたったと答えた。

（3）佐々木報告をめぐって

討論者の渡辺氏から，①「政治改革」という概念の理解については日中でズレがあるのではないか，②「社会」の「自立化」，「一党支配」の「強弱」といった枠組みは，毛沢東時代にも適用できるもので，相対化して使うべきではないか，との質問が出された。これに対して佐々木氏は，①日中で理解にズレがあるが，ここでは政治制度の改革という意味で使用した，②毛沢東時代にもこの枠組みは適用できるが，相違がある，と答えた。

フロアーから玉村伸氏が①グローバライゼーション（改革開放政策）によって，財産権など（日欧米の「民法，商法」に相当）の改革は，共産主義的な旧法の改革を前提としているのか，運用，細則の変更の範囲内のものなのか，前者であれば「弱者がアクターとして機能する政治改革」の糸口になるのでは，と尋ねた。この点について佐々木氏は，WTO 加盟に見るように前者の点にも踏み込もうという姿勢はあるが，実際は運用，細則の次元である，と答えた。田中仁氏は，①「ブルジョワ」と「国民政党」の二面性という捉え方には問題があり，中国共産党にとって「労働者階級の前衛」という立場は大前提ではないか，②学生の入党が顕著だが，入党は何歳から認められているのか，と尋ねた。これについて佐々木氏は，①は田中氏の指摘通りだが，経済エリートの存在を重視する視点から「二面性」を強調した，と説明した。さらに阿古智子氏から，農民などの弱者をアクターとしてどうとらえるか，農業税全廃により国家―社会関係が弱体化しているが，これは国家権力の農村社会からの退出といえ，農民の国家（公共）政策への非協力，コミュニティーの不安定化がみられる。このような農民を政治体制変革のアクターとして捉えることができるのではないか，と尋ねた。これに対して佐々木氏は，農村の問題は個別的で「一党支配」を揺るがすほどのものとはなっていない，阿古氏とはアプローチの仕方の点で違いがある，と答えた。上原一慶氏は，佐々木氏は「中間層の増加」というが，現実は，「中下層」が増大しており，政治的安定というより彼らの要求を政府が取り込めない点でむしろ不安定の状態にあると見るべきではないか，と尋ねた。この点について佐々木氏は，「中下層」の増加は認められるが，しかし，社会的な不安定はただちには政治（一党支配）レベルでの不安定を意味するものではない，と答えた。

最後の自由討論では，まず菊池一隆氏から，土田氏に対して，①アメリカの反戦運動に

は大山郁夫の役割があったのではないか，②ヨーロッパの反日運動については，陶行知ら欧州華僑連合など在欧中国人の活動との関連を考慮すべきではないか，③胡適や賀川豊彦らの世界連邦国家樹立へ向けた運動とのつながりがあったのではないか，との質問が出された。これについて土田氏は，①の点については今後の課題とする，②陶行知らの救国運動との関連はあった，③についてはよく知らない，と答えた。続いて田中仁氏が，救国会と中国共産党との関係について，たとえば銭俊瑞は救国会における中国共産党のトップであり，宋慶齢も中国共産党員ではなかったか，欧米での活動という点ではジュネーブの王安娜などにも注目すべきだろう，と指摘した。さらに田中氏は佐々木報告について，アクターに光を当てるべきではないか，統治行為の主体と客体の問題である。グローバル化のなかで中国が国際的存在として登場してきているととらえるべきだろう，と指摘した。又，阿古氏は，土地分配など公共政策との関連でアクターの問題を考える必要があろう，と指摘した。

次に 3 人の報告者から全般的な発言がなされた。まず岡本氏は，「洋務」は中国の文明的転換を意味している。「世界政治」という点でいえば，19 世紀は帝国主義がアジアにまで及んで来た時代といえる。イギリスは中国には領土的野心を持っておらず，李鴻章はそうした動向をつかみバランスよくやっていたのである。今後はイメージ論を肉付けしてゆきたい，と発言した。佐々木氏は，アクターと学生との関係について今後研究を行うつもりだが，彼らの「取り込み方」によっては不安定要因にもなりうる。党をアクターとして捉えることに賛成する，と述べた。土田氏は，世界平和運動と国際共産主義運動との関連については今後つめてゆくつもりで，銭俊瑞や宋慶齢に関してはご教示いただきたい。入江昭のいう戦間期の二つの流れで問題を捉えているが，日米でズレがあり，E. H. カーのように理想主義が戦争を抑止できなかったという批判もあると述べた。

最後に上原一慶氏が立って，今日のシンポジウムは大変参考になった。私たちの現代史研究会は，現状分析の専門家と歴史研究者が仲良くやっている研究会である。この百年，変わったもの，変わらなかったものはそれぞれ何か，今日の討論を踏まえ，考えてゆきたいと締めくくった。

「世界政治の中の中国」は，テーマとしては壮大で，興味深いものであり，問題の設定として意欲的であり，また，3 人の報告もそれぞれ刺激的であった。ただし，3 人の報告は時代が大きく離れ，また分析の対象や方法も違っていて，コメンテーターも個別報告を全体のテーマとどうリンクさせるかという点で苦心されていたようだ。あるいはこれは司会の責任だったかもしれないが，今後の検討課題であろう。

（やすい　さんきち・神戸大学名誉教授）